

せたかむい

古平町役場総務課
842-2181(袋)
平成20年11月1日

年表で読む 古平の歴史

134

アイヌの 伝承と記録

1. アイヌとの交易

◇アイヌの遺物など

古平では、先住民族であるアイヌの人たちの記録はほとんど残っていない。先号で紹介した遺跡の位置とは別に、小規模ではあるが町内の諸所からアイヌの造った石器類は見つかるが、日用品や装身具などはごく少ない。

石器類などの見つかるのは川の近くの平地のほか、ゆるい南向きの斜面で、やはり近くに川や水源

がある。

古平旅行村へ通じる歌棄トシネル側の南斜面、新地町の神社へ向って左側の南斜面、丸山の南側山麓から平坦地の辺りは畑として利用されていたので、農作業の際に人目に触れることが多かった。

◇松前家の記録から

松前家について書かれた古い文書によると、「…松前から東は鰐川（むかわ川）、西は興依地（よいち川余市）まで人間が住んでい」とあるが、ここでは和人のことを言っている。

古平の海は、丸山岬が突き出ていることから海運には都合よく、

和人も早くから住み着いていたと考えられるが、アイヌの人たちは他に移動したり、或いは伝染病（特に疱瘡＝ホウソウ）などで倒れ、明治の末にはほとんど住んでいなかった。

康正二年（一四五六）、コシヤマインの乱が起きた。原因は和人とアイヌの少年とのふとした言い争いから、和人がアイヌの少年を刺し殺したことにあった。

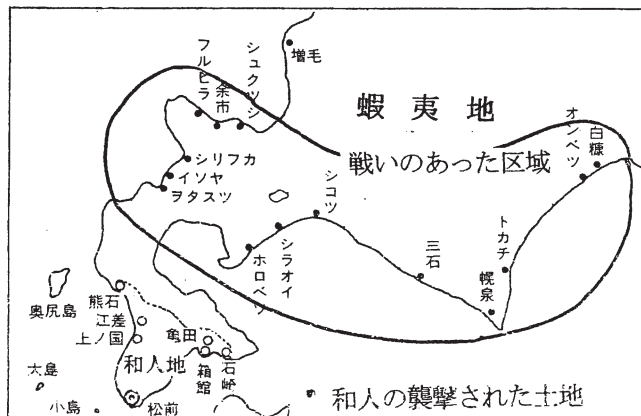
これに怒った渡島半島のアイヌが、周辺にあった和人の館（やかと）小規模な城）を攻撃し、一二館のうち二館だけを残り一〇館が陥落した。その後も戦いは大永五年（一五二五）まで、七〇年近くも続いたが、最後は領主側の有利な条件で終った。

このような事件が、当時のフルビラにどのような影響があったのかは分からないが、後の「場所制度」に深いかわりがあったことは確かである。

ようやくアイヌとの争いが終わって一五〇年ほど経った寛文九年（一六六九）、ほぼ蝦夷地全土を巻き込むような和人とアイヌとの戦いが起きたのである。この戦いで

は当時のフルビラでも死傷者が出ると大事件に発展した。

→シャクシャインの戦いの関係図



ことの起りは、現在の静狩付近に勢力をもつアイヌ部族が、自分達の狩猟場所をめぐっての争いであり、シャクシャインの戦いといわれている。松前藩もこの重大さに驚き、幕府に報告するとともに、いざという時には援助を頼むと津軽藩にも連絡していた。

△続く▽

昭和四年、続く

▼一月三日(雪)

起床八時、今日も寒さはなかなかきびしい。雪は相変わらず降り海上は時化だ。カレ網、スケソ釣りなど五日間も休みだ、よく時化ることだ。店の前から中庭まで雪でいっぱいだったが、中庭はようやく雪を除けたので少し明るくなった。格子のところは雪でいっぱいなので、私らの休む部屋は真っ暗だ。天気次第で雪引きをやるつもりだが、この天気模様ではいつなざることやら。この朝、店の寒暖計は二十九度F(マイナス二・四度C)、佐渡へ電話をかけたら五十五度F(十二・四度C)だという。この頃、佐渡の気候ならちよいとよい。幸治と父から手紙がくる。小樽でも大雪で、家に入るには穴へでも入るようだとのこと。岡崎おばさんから、二人ともお年玉をいただいたとのこと。熊さんは午後から自分の家の屋根の雪下ろしに行く。夜、困へ行く。十母さん丹毒ではなく、心配するようなことでもなく、二週間ぐらいで

良くなるとのこと。小樽病院に入院。八時頃戸外へ出てみる、久しぶりの青空に十三夜の月が輝く。明日は良くなるだろう。

▼一月二四日(雪)

起床七時、今日は少し寒さがゆるい。熊さんと天野さんは店の前の雪引きをやる、何分大雪だからまだまだ何日もかかる。今日午後

決心がつかぬ。

▼一月二五日(小雪)

起床八時、寒さもまた少しゆるくなったようだ。熊さんは平さん、天野さんらと雪引きをやる。店は罾刺網がポツポツ出る。しかし、何分昨年が不漁のため例年の十分の一ぐらいだ。海はナギで漁船は出た。午後一時から立で新潟県

あ野名孝作さんの日記から 当時の世相を見る

[141]

一時から古平役場で灌漑溝組合の事業を町営に移管する件につき総会がある。いろいろ協議の結果町営にすることに賛成した。不日、町会に提案されることになる。午後四時終って帰る。吉治は本年卒業、トシは高等二年になるが、どちらも上の学校に入れるのだが、幸治、文治も在学しているのでうしたらよいのか、学費の問題で

人会の役員会があり行く。協議の結果、来る二月三日禅源寺で総会を開くことになった。なお入営兵に対してハガキ五十枚送ることも新規に決まった。聞けば大和田のスケソ釣り船が故障で曳航され入港、延縄を全部流失せりとて、今日二丸持つて行く。スケソ釣りもなかなか危険なようだ。夜、長尾貞治さんが来たので、通信局講習

所入所の手続き、その他詳しく聞く。一カ年で卒業、入学中は月二十円の補助があるとのこと、よいものだ。早速説明書一通を申し込む。幸治は高商入学志望につき今後学費がかかる。十五夜の月光が輝き静かなよい夜だ。

▼一月二六日(小雪)

起床八時、今日は雪も降らず寒さもラクだ。例の通り熊さんらは雪引きをやる。妻は中の命日だとして寺参りに行く。小樽十店員が午後から来ている話し今夜泊まる。帝国議会開会中、論戦がはげしいが、何分多数党の政友会にはかなわぬようだ。結局、今議会も議案が通ることになろう。美国又さんが来てアバ縄十二個注文して行く、明日、馬そりで取りに来るとのこと。夜、支店のふろに行く。後十社員といろいろと話す。

▼一月二七日(雪)

起床八時、今日も三人で雪引きをやる。午後からは吹雪になったので見合わせた。昨夜は十店員泊まり、今朝は入船町方面から美

国へ行くと言って出かけた。又からアバ縄を取りに馬そりが来る。佐渡の林政吉から「キチフネアルナワイカカ」とで電報が来たので、早速六〇個注文した。夜は帳簿調べをやり、十二時休む。

▼一月二八日 (晴)

起床八時、今日は晴天だ。熊さんは例の如く三人で雪引きをやる。久遠宮殿下には四、五日前より不快のところ、二十七日午後一時薨去されたとのこと、逝去を悼む。月末なので目録を書く。幸治は通信講習所の試験を受けるとして勉強している。

▼一月二九日 (吹雪)

起床八時、今日は寒さもきびしく雪も降る。店にいても顔が冷たい。妻は昨日から歯が痛いと言っていたが今日はよいようだ。熊さんは午前中入舟町方面へ集金に出かけた。カレ網はよかったせいか掛金も入る。雪は今日も相変わらず降る。

▼一月三〇日 (雪)

起床七時半、今朝の寒さはまた

格別きびしい。コタツに入っても顔や耳が冷たい。今日も吹雪。コタツに入っていて時々手習いする。手習いも十二月頃は熱心にやっていたが、この頃は怠けがちだ。

▼一月三二日 (雪)

起床八時、今日もきびしく寒さ、

朝二六度F (マイナス三・四度C)

だった。熊さんは午前中入舟町方面へ集金に出かけた。雪は相変わらず降る。マツ子が二月末まで積丹の困漁場へ行く予定だったが、

足と腰が調子が悪いというので、

少し養生したほうがいいと思ひ返すことにした。これから手不足になるので皆忙しくなるだろうが仕方ない。午後五時ビヤホールから電話が来た。ドロノキ木村老父死亡したので、祝聖会員として通夜に参列してお経をあげたほうがよろしいだろうとのこと。早速、松岡、竹内、北浜、山田さんらを誘い、大急ぎで六時、ビヤホールから出発する。途中は雪道と厳寒でゆるくなかった。六時四十分頃着いた。八時頃から読経し、九時半頃家に帰る。雪の多いこと、畑方面では家に入るのに穴に入るよう

よう、こんなに雪に多いのも珍しい。疲れたので十時休む。

▼二月一日 (晴)

今日は祝聖会の例会日、昨晩は

ドロノキ木村さんへ通夜に行き往復二里も歩いたので、それでも気が張っているので四時頃から目が覚めた。五時半に目覚ましをかけていたので、鳴るやいなや起きた。

今日の寒さは格別、水がめの水も凍っていて顔を洗うのも冷たい。

お寺に着いたのは五人目、ストーブにあたり六時一〇分から読経、そろそろ明るくなる。七時に終わったが、足も手も痛いぐらいの寒さだ。今冬中一番のきびしい寒さならん。八時帰る。熊さんは屋根の雪下ろし、妻は一人なのでなかなか忙しい。十二時頃ドロノキ木村の葬式が着たので見送る。夜は困へ行き主人といろいろ話す。

▼二月二日 (沖風時化)

起床七時半、今日は沖風が強く

吹き時化になった。寒暖計は三十四度Fまで上がる。昨日からみれば大分曇った。新聞によれば、昨日朝の寒さは札幌零下二十八度Fで、

近年にない寒さであったとのこと。昨日祝聖会の本堂でのお勤めも随分と冷たかったが、どこもきびしい寒さだったようだ。札幌測候所でも大正十年来のレコードであったとのこと。風は吹雪と変わり荒れた天気になった。

▼二月三日 (沖風時化)

起床七時半、引き続き沖風が吹き

き沖は時化、余市通いも止まる。

妻は忙しく久をおんぶして朝食の準備をしている。午前十時頃から

禅源寺で新潟県人会の総会がある

ので行く。十一時半ようやく始まる、七十人以上の集まりだ。鍋焼

き、酒などが出て、一時半終わって

帰る。今日は節分、子供らは早く

豆をまくようにと楽しみにしている。

熊さんが湯に行き、帰ってから七時頃豆まきをする。今年は少し

変えて、豆にビスケットをまぜて

まいたので子供らは大騒ぎ、久は

私がだっこして見ている。一同大

喜び、その後も騒いで九時頃床に

入ったので家の中はヒソソリと

なかった。風は静かに波もだんだん

なくなり、この分なら明日はよい

だろう。

▼二月四日 (雪)

起床七時、この頃では早起きだ。風もおさまり海もようやくナギてスケソ、カレ網の漁船も出た。雪は降るが寒さはゆるく凌ぎやすい。熊さん午前中は新地の銀行へ行く。店は例年なら、この時期から刺網類相当に出るのだが、昨年の不漁で今年はさっぱり出ない。幸治から高商願書に添付する戸籍抄本送ってくれと来たので早速送る。本陣の沢の石井さんで十九歳の男の子、昨春から不快のところこの頃よろしくないとのこと、気の毒なことだ。

▼二月五日 (晴)

起床七時、この頃はマツ子が居ないので家中忙しい。私も早起きするが、妻はナカナカ忙しい。朝、三穂丸で寺泊の林からアバ縄六十個着き倉入りした。店は相当に忙しくなった。寒さもこの頃は余程凌ぎ易く、今日なども午後には屋根からしずくが落ちるほど温かい。これなら楽なものだ。上ナギで勇丸も来た。幸治のところへ三尺帯を託した。夕方、久をおぶって浜

へ出てみる。上ナギでスケソ船が入港、種田の浜では人が出て賑やかだ。あと一ヶ月も経てば浜は活気づき賑やかになるだろう。

▼二月六日 (小雪)

起床七時、この頃の七時は早いほうだ。私は子供たちの着物を着せたり、いろいろ朝の支度をする。小雪降るが割合温かく凌ぎ易い。熊さんは久しぶりで農園行き。板倉や小屋の雪下ろしをやったとのこと。イサバやがスケソのフエ子売って歩いていける。スケソも十一月から一月までは子が上等だが、二月にはいるとフエ子になるというがほんとだ。これからはスケソ網の時期になるのだ。

▼二月七日 (雪)

四郎が、昨夜ゴホンゴホン咳をしていて平素と違うので心配していたが、今朝は元気に起きて遊んでいるので気にも掛けずにいたが、その後、のどがズーズーするので井上さんへ連れていったら、往診で新地へ行ったとのことなので、近藤さんへ行き見てもらう。注射してもらって帰る。夜になってよ

ろしいようで、スヤスヤと眠っている。雪は随分と降る。

▼二月八日 (雪)

起床七時半、昨日は四郎の風邪で心配したが注射が効いたか昨夜からセキもだんだん治まってきたようだ。そしたら約束していたスキーを買ってくれとせがむので、仕方なく九十銭で買ってやった。大喜びで外へ出て滑っている。まだ少しセキが出るので家に居れと言ってもなかなかかきかぬ。午後一時から組合事務所火防組合の組長、副組長の選挙があるので行く。十九名が出席し投票の結果、組長本、副組長は支店と私が同点となったが、支店が前年も勤めていたので辞退し、私に役がまわってきた。とんだことになった。五時帰る。寒さが強くなってきた。

▼二月九日 (雪)

起床八時、朝は天気快晴。店はカレ網の客で忙しい。昼頃から三寸目スケソ網の客がにわかに増えた。聞けば今日、沢江、田口の船でスケソ網試験の結果、一把に二百尾宛とれたとのこと、急に騒

ぎ出したのだ。次から次と客が来て、夕方までに三寸目が四千間以上も出た。二、三日前に網が着いたばかりで、八千間ばかり仕入れたのでちょうど売るのによかった。今日は旧年取りに当り、田からモチを貰ったので神仏に供えた。四郎はまだセキが少し出るが、デフテリヤでなくてひと安心した。戸外に出るなど言っている。悦三や順治が、中庭でスキーをやっているのをガラス窓から見ている。どんなに遊びに出たいものやら、随分心配したが元氣よくなったのでよかった。九時頃床屋に行き十時帰る。雪も随分降り寒さもきびしい。

▼二月一〇日 (晴後雪)

起床七時、今日は旧正月元旦だとして、あんモチの馳走だ。モチもたまに食べるとおいしい。今年はどこも大雪には困っている。熊さんらは今日も雪引きだ。店は沢江からのスケソ網の客で二百間、三百間と出る。一時に七、八人の客が来て忙しかった。四郎と悦三はコタツに入って見ていて売り出しのようだとやっている。カレ網も

三日前八千間着いたが、意外と売れ行きがよろしく、今日までに全部売れ予想以上によかった。スケソ網も残り少なくなったが、浜は何やら漁があればよい。漁さえあれば商いも楽だ。午後四時頃から大吹雪になり、雪引きも休む。四郎のセキも止み、この分なら大丈夫、しかし今日一日は戸外には出さず養生させている。

▼二月二日(雪)

起床七時、昨晚から今朝までの寒さは随分きびしい。顔や手が冷たい。妻は六時頃から起きて支度に忙しい。今日は吹雪で雪引きを休む。一昨日からにわか売れ出した三寸目網、今日も朝から三百間、四百間と何人も客が来て、夕方までには八千間来たのが全部売れてしまった。こんなに売れるとは予想外だ。カレ網八千間も全部出た。夜、早速三重製網へ、二月廿五日出荷として注文した。今日は紀元節、子供らは儀式に行く。命日で和尚さんが来られたが、忙しいので早く帰る。夜になり晴れて星が満天に輝き、寒さもゆるみ良夜になった。今日の新聞による

と去る九日、余市水試の探海丸が古平丸山町沖八里において初鯨三尾漁獲、昨年より二十日早いとのこと。幸先がよいから本年はきつと大漁ならん。四郎は日増しによりく安心した。

▼二月二日(快晴)

起床六時四十分、まだ電灯がついている。朝はかれこれ支度で忙しい。今日も熊さんら三人は雪引きをやる。天気快晴で小春日和のようだ。浜へ出て見ると上ナギ、小樽通いの共栄丸、勇丸が来る。浜は広々として見晴らしがよい、あと一ヶ月もしたら浜も賑やかになるだろう。九時頃(本)からの通知に、大阪へ行っている加瀬直さんが、流感で突然死亡せりとの電信が着いたとのこと。驚いた、あの元気な人が、実に人生は一寸先がわからぬもの、早速吊いに行く。子供も五人居り、気の毒なことだ。死亡通知状を書くのを手伝い正午帰る。四郎は良くなったようで、平素の通り戸外へ遊びに出ている。明日は花回りだと喜んでいいる。

▼二月三日(雪)

起床七時、まだ電灯がついている。この頃の寒さは随分きびしい。熊さんら三人で今日も雪引きをしているが、まだまだたくさん雪こんな大雪も珍しいことだ。今日はお寺の花廻り、十一時お参りする。お寺で(困)の施餓鬼供養があり、のち座敷で昼食をよばれる。一時から花回り、四郎が熊さんにおんぶされて来た。子供たちが百余人も集まり随分賑やかだ。お参りに来たのは九分九厘女連で、一時半頃おわり四郎を連れて帰る。寒くて寒くて手も足も冷たかった。夜は加瀬さん死亡につきお悔やみに行く。知己が十人くらいも来ており、いろいろ話をして十時半帰る。雪は切れ間なく降り続けている。今日の樽新に、古平町長決定と題し、現三石村長の武田典氏、町会にて満場一致推薦される、と出ている。

▼二月四日(雪)

起床七時、昨日よりは少し暖かいようだ。今日は熊さんと万太さんで雪引きだ。毎日毎日の雪投げだ。四郎も元気になり、例のスキ―をはいて喜んでいいる。午後一時

から禅学会があるので行く。講話があり、終って四時から夜食、六時からお経あり、のち修証義をあげ、八時終って和尚の部屋でいろいろ話し、湯豆腐に酒をよばれ、ラジオを聞き九時半帰る。古平警察署長塚本氏は札幌へ転任されるとのこと。

▼二月十五日(雪)

祝聖会の例会日、五時十分に起床、朝の火をたき五時三十分出かける。朝は特に寒い。寺に着いたのは五人目、六時から本堂で読経。今日は少し寒さもゆるくなったようだ。終って和尚の部屋で話し八時帰る。店はカレ網を買う客で忙しい。夜、加瀬さんのところへ行く。野村、森山その他女連と仏前で修証義をあげた。十時帰る、雪がチラチラ降っている。

▼二月十六日(雪)

起床七時、今日も寒さナカナカきびしい。熊さんは昨夜来降った雪かき、私は板戸を開け店の始末をする。今日は中の三十五日の命日で妻が行く。米田さんが来て、今日午後一時から郷社で電気会社

発起の鯨大漁祈禱があり、部落長として招待を受けたが、所用があるので私に行つてくれとのこと。午後一時大さんらと行く。吹雪になつてきた。久し振りで社務所で休み、二時から祈禱が始まる。

何の仕事をしている人でも鯨大漁願わぬ人はない。本年は全てによいからキツト大漁ならん。三時に終る。紅白のお鏡一重宛て参列者に下さつた。外に切り餅もいただいて帰る。帰途ヨに寄り、いろいろ話し六時家に帰る。夜、支店の湯へ行く。

▼二月十七日 (雪)

起床七時、今日も寒さはナカナカきびしい。カレ網昨日まででまた売り切れた。スケソ漁はこの頃子が皆無になつたので、製造する方は一尾一錢ぐらいでなければダメとのこと。釣る方も少しぐらいで間に合わぬとて、二、三日中には大抵切り揚げるとのことだ。四郎はすっかり元気になった、朝からスキーで一生懸命だ。午後から私は火防組合の巡視に、中央部落辺りを廻る。どこも大雪で大変のようだ。三山神社の坂の上から、

子供ら五、六十人がスキーをやつていて気持ちよさそうだ。今朝、吉治を連れ近藤病院で健康診断を受け、通信講習所へ入学願書を出した。

▼二月十八日 (晴)

起床七時、今日は珍しく天気快晴。小樽から共栄丸、勇丸が来た。正午頃、加瀬さんの遺骨が来る。二十日前まではピンピンして元気であつた人が、今は風呂敷に包まれて来るとは、全く世の中からぬものだ。三時頃まで居て帰る。夜、加瀬さんへお参りに行き、お経をあげ十時に帰る。星は満天に輝き良夜だ。

▼二月十九日 (雪)

起床七時、今日は風が幾分強く吹き、海は時化になつた。熊さんは加瀬さんの通夜の手伝いに行く。店は割りと閑散だ。四郎は店のわきの雪山で滑っているがナカナカ上手になつた。疲れて家に入ると、正治と二人でカルメラ焼きをやっている。こんな時代が一番楽しいのだ。夜は加瀬さんの通夜に行く。

▼二月二十日 (雪)

起床七時、熊さんは加瀬さんの葬式手伝いに行く。私も九時半、白を着て見送りに行く。あの元気で名物男の加瀬さんも逝つたのだ。見送り人も沢山あつた。今日は学校で学芸会があるので、十一時半、四郎を連れて行く。公開授業が三十分ほどあつて、のち学芸会が始まる。十種目ほど見た頃、四郎が帰ると言い出したので二時半帰る。四時から加瀬さんの忌中引きによ

ばれて行く。読経後お膳が出て、帰つたのは六時。余市・余別間鉄道、衆議院を通過したとの電信が来たというので、今日各所へ張り紙が出た。

▼二月二日 (雪)

起床七時半、熊さんは加瀬さんの後始末の手伝いに行く。店は積丹方面から刺網の注文がポツポツあり、小包で送る。妻はナカナカ忙しい。子供たちは風邪もひかず壮健で幸せなことだ。この日午後から雪が降るわ降るわ、四時頃までに一尺も積もる。今年のように雪の降るのも珍しい。古平町長武

田典氏、今日着任されたとのこと。古平警察署長井上達氏も昨日着任されたとのこと。小樽庁商卒業式は三月七日挙行と新聞に見ゆ。卒業式に行きたいが、すぐ、また吉治を連れて十日頃行かねばならぬので行かれぬ。

▼二月三日 (晴)

起床七時、マツ子はまだ帰つてないので、子供らも大勢で朝はナカナカ忙しいことだ。昨日の雪は随分降り一尺二寸も積もつた。実際本年の雪の多いのには驚いた。熊さんは午後から屋根の雪下ろしをやる。中庭の雪は三度も投げたが、屋根から下した雪でまたいっぱいになり、家の中も暗くなつた。例年なら店も随分忙しいのだが、昨年の不漁でサツパリ、随分とびまなことだ。正午頃、青空を見ると春景色になつたようだ。早く鯨場が来て、あのヨイサヨイサの元気な声を聞きたいものだ。庁商卒業式三月七日だと、幸治からハガキが来た。



(続く)

町内の学校探訪

15

古平小学校

◇教員講習会の開講〜続く

この当時、教員の採用や補充は困難であつたことから、このような講習会はしばしば行われていたが、町ではこの年、町内の準教員の中から、月一〇円の学費を補助して一カ年の正教員講習会を受講させ、町内の小学校に復職させるなどをして、教育の充実を図るための施策を講じた。

◇文化人の来町

大正一〇年、古平教育会の会員は一〇人になり、積立て基金は四五〇円を超えたが、この年、さらに町から補助金五五円を受けて

七日間の水泳講習会を主催した。

この年、港町種田励三が自費をもつて福来友吉博士を招聘し、古平尋常高等小学校で講演会を開催した。当時、このような講演会や行事、多人数の会合には小学校が会場として利用され、町にとつての文化の中心でもあつた。講演は心理学に基づいたもので聴衆に深い感銘を与えた。また福来博士は書を能くし、希望者には書が与えられ、額装して掲げている家も見られた。

同年一〇月、文豪大町桂月を迎え、古平尋常高等小学校で講演会が開かれた。桂月は「層雲峡」の名付け親でもあり、俳人としても

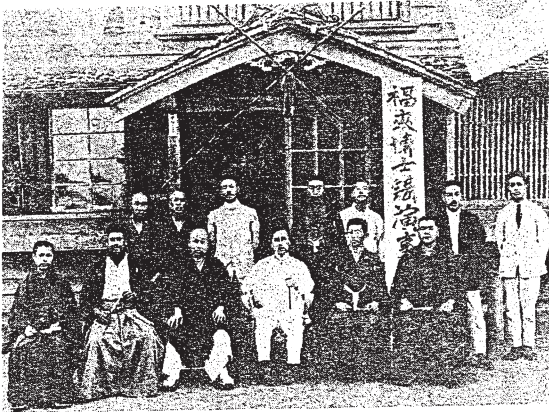
知られていた。北後志の主な地を徒歩で探訪し、「北海耶馬溪」と名付けている。

古平には次の句の短冊が残されている。

玫瑰や自動車（くるま）に走る
裸の子 桂月

またこの頃、東洋大学学長文学博士井上圓了を迎え講演会を開催した。

井上圓了は明治三年、志賀重昂、三宅雪嶺、杉浦重剛らと共に



→ 福来博士は種田励三氏宅に宿泊した。その際の自宅前での記念撮影。前列の白い服が福来博士

雑誌「日本人」を発刊し、その後「国民の友」を創刊し、欧米事情を紹介した。

この年八月、種田励三は巖谷小波をも招聘し、古平尋常高等小学校で童話会を開き、「指輪を廻して祈り、宝物を出す王子様」の話をし、児童の興味と関心を大に高めた。

巖谷小波は名を秀雄、連山入とも号した。明治三年、書家巖谷一六の三男として生まれ、硯友社の一人で俳句誌「赤壁」などにも関係し、俳人としても知られていた。当時は早稲田大学講師、文芸院委員でもあつた。来町の際に句会が開かれなかったが、次の染筆が残っている。

古平にて 小波

浦涼し山の円さを水鏡
眼の下や夏風の湾舟の数

◇油絵の寄贈

これより前の大正五年、小樽区（現在の小樽市）在住の洋画家工藤三郎が来町し児童の図画教育を奨励するためとして、油絵（二〇号）一枚を学校に寄贈した。

作者の工藤三郎については、『道

新・人物散歩』で次のように紹介されている。(記事を要約)

『小樽初の洋画展開いた先駆者・工藤三郎(1888—1932)』

「対象をじっくりと観察し、静かにわきあがつてくる感興を大切にした」(道立近代美術館)という洋画家。洋画家の団体を結成し、小樽で初の洋画展を開いた。明治末は北海道の美術界はまだ黎明期。そういう時代に、学生が自分の絵を見せる展覧会を開くとは、才気に満ちあふれていたということか。←厚古岬から見た鯨漁の油彩



渡仏後の大正十三年(1924)、小樽に帰郷し、洋画の先駆者ながら素朴な人柄から後進に慕われたという。

後志管内にかかわる作品では、ニシン漁に沸く浜の活気を描いた「海の幸」(油彩、制作年不明)などがある。』

古平町ではこの油彩の寄贈に対し、大正六年、表彰状に木盃を添え贈った。

この油彩には画題がないが、厚古岬から見た宝島、積丹半島の絶景とニシン漁の風景が描かれている。旧校舍では、職員玄関上の六畳ほどの応接室に掲げられていたが、現在は校長室に飾られている。

◇校舎増築計画

明治四二年、児童数の増加によって校舎を増築したが、その後も就学児童数は増加の傾向にあり、また、継続使用している旧校舎の一部にも老朽化による危険な箇所もあることから、近く校舎の整備をし、新築しなければならぬ状態にあった。校舎の新築には多額の費用を要するので、その費用を得るために年々積み立てすること

にし、大正二年一月、次の管理規則を制定した。

古平町小学校修築積立金造成及管理条例

第一条 本町は小学校の新築、改築、増築、移転等を要するとき、その工費に充用するため本規則により小学校修築積立金を造成し、及びその管理をなすものとす

第二条 前条の積立金は、一般会計より繰入金及びこの積立金より生ずる収入、または指定の寄付金を以て蓄積す。前項の繰入金は毎年度予算を以てこれを定む。但し天災、事変等やむを得ざる事故に基づく支出、もしくは町の永久利益となるべき支出をなすに当り賦課を増加し、ために負担に堪えざるときは町会の議決を経て、全部または一部を蓄積を停止することあるべし

第三条 積立金は郵便貯金となし、利殖を図るものとす

第四条 本規則の積立金は、別に定むるところの特別会計規則により収支するものとす

附則

本規則は大正三年度よりこれを

施行す

この規則と同時に、古平町小学校積立金特別会計規則を制定、同時に施行した。

この規則により、大正六年、初めて一般会計から金五百円を積み立てた。また、高野常吉から金二百円の使途指定の寄付があり積み立てた。この寄付に対し北海道庁長官から木杯一組が贈られた。

◇教科と特別教育規定

明治政府は教育の近代化を図ることが、日本の将来の発展に欠かすことが出来ない重大な問題であるとして、明治五年八月三日、学校制度を制定し近代日本を目指して学事の奨励を図った。

それより前の明治三年、開拓使は政府に北海道開拓に関する意見を具申したが、その中で、教育に関しては「将来の重要な問題」としか捉えていなかった。

しかし、学校制度の制定により、大正五年、庁令で「小学校教科目教授の程度及び教科数に関する規定」と「特別教育規定」が公布され、大正六年四月一日から施行することとした。

(続く)

〳 積丹半島横断道路〵

神恵内道路の建設

❖ 海岸道路と共に

昭和二八年五月一八日、古平・余市間海岸道路と共に、道路法の改正により新たに二級国道に指定された。

ところがこれ以前の四月、吉田茂首相の世にいう「バカヤロー」国会解散となったため、二級国道指定による四、五月の暫定予算として、六志内道路改良工事に五〇〇万円が計上された。

この時期、すでに古平・余市間海岸道路のうちセタカムイ随道が貫通し、工事も着々と進行していた。古平・神恵内両町村をふくめた関係町村が早くから早期着工を働きかけていたが、二級国道小樽・江差線の一部に指定されたの

を機にいよいよ本格的な工事が始まった。

❖ 年度別工事の概要

昭和二四年、神恵内側からトーマル開拓地へのトーマル殖民地線として着工されてから、一般国道古平・神恵内村間道路として開通するまでの工事概要は次のようである。

施工年度	工事名
昭和二四年	開発道路トーマル殖民地線神恵内村清川地内新道
同 二五年	右 同
同 二六年	清川地内トーマル団地開拓道路新設
同 二七年	右 同
同 二八年	2級国道小樽・江

差線古平町六志内地方道路改良

同 二九年〳三六年 右 同
同 三七年 当丸・神恵内村間道路改良

同 三八年 六志内地第1・2工区道路改良

同 三九年 同第2区
当丸・神恵内村間道路改良

同 四〇年 当丸地区第2工区
同 四一年 同第1・2工区道路改良

同 四二年 当丸地内道路改良

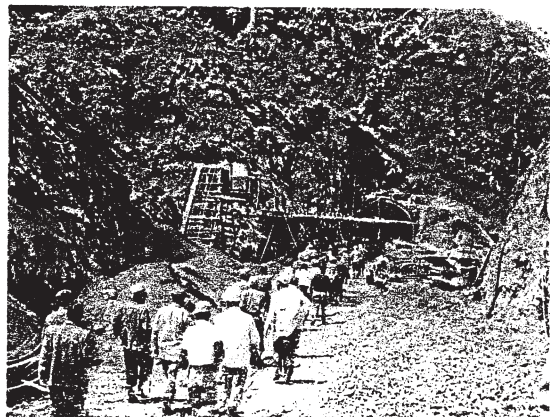
(昭和四十二年八月十日 小樽開発建設部 工事概要書から抜粋)

❖ 橋の架け替え

昭和三八年、古平・神恵内の両方から掘進が始められたが、六志内トンネルの開通によつてトーマル峠に達し、昭和四〇年、トーマル団地の旧開拓道路につながった。開拓道路として依然に開通していた道路は幅員が狭かったが、二級国道になってから車道の幅員五メートルの規格で整備され、その後もさらに拡張された。

道路の整備にともなつて、新しい道路の規格に合わない、また、

老朽化も進んでいたそれまでの木造の橋は、全てコンクリートの永久橋に架け替えられた。	（三八年〳四三年に建設された橋後に陸橋も建設された）
神恵内村 茶屋町橋	六八呎
同 ヤエダウス橋	七一呎
同 第一号橋	三三呎
古平町 廻り淵橋	六四呎
同 泥の木橋	四三呎
同 六志内橋	六〇呎
計	三三九呎



← 古平町長や町議員らが六志内随道建設現場を視察する

◆積丹半島横断道路 として竣工・開通式

昭和四二年八月一日、一般国道二九号線古平・神恵内間の道路改良工事が竣工し、工事起点で修祓式を行う予定であったが、あいにくの雨となり、神恵内小学校に変更された。午後一時から二百人余りが参加して行われた修祓式の後、小雨模様の中、工事起点でアーチに吊るされたくす球を割って開通を祝い、テープカットをし、バス、乗用車、トラックなどおよそ五〇台を連ねて現場から新設された横断道路を通り、開通式会場である古平小学校までパレードをした。

この日古平町内では歓迎塔を建て、国道沿いには大漁旗や横断幕、商店街では紅白幕も張られ、先頭車が会場に着くと花火が打ち上げられ、町内は積丹国道の開通に続き、積丹半島横断道路の開通を祝う歓迎一色に包まれた。

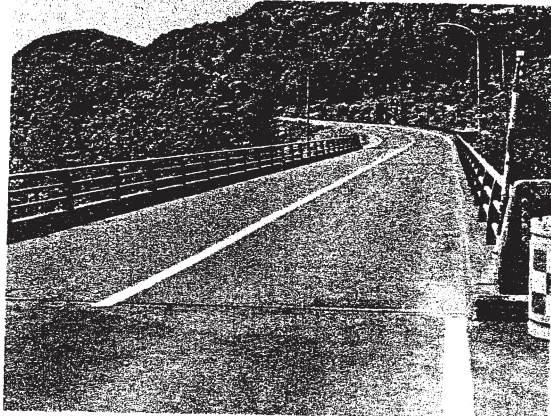
午後三時から古平小学校で開通式が行われたが、四百人を超える盛儀であった。引き続き同校体

育館で祝賀会が開かれた。

昭和四二年二級国道に指定されてから一四年、ここに積丹半島横断道路としての二九号線古平・神恵内間の開通をみたが、四二年から四七年までの道路五カ年計画でさらに整備が進められ、その後全線舗装となった。

◆二級国道決定までの経過

昭和二七年七月七日、法律第一八〇号で新しい道路法が公布され、全国の国道格付け認定が公表され



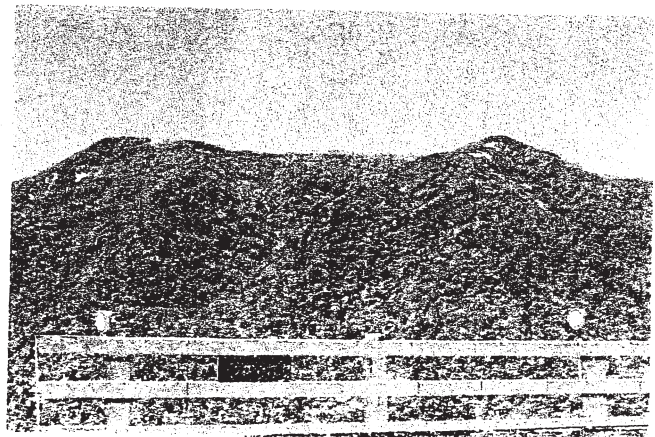
→ 当丸峠への登りの口六志内橋

た。これによると、二九号線は函館―江差―瀬棚―寿都―岩内―倶知安を結ぶ路線が政府原案であった。これによると、積丹地方唯一の地方費道として建設中の古平・余市間海岸道路は国道から除外されることになり、当時、豊浜隧道の難所に取っかかっていた矢先のことでもあり、海岸道路は豊浜から再び旧山道へ取り付けられ、これで工事は中止になるかも知れないという情勢に陥った。

その後、北海道開発庁、北海道開発局、北海道庁による岩内―倶知安の路線を廃し、余別村を経由し、古平―余市―小樽に至る積丹半島を廻る修正案が出された。古平町ではこの修正案の実施を要請し、数度に及ぶ中央への陳情を行った結果、岩内―共和から稲倉石に抜け、古平―余市―小樽に至る路線に修正することにになった。

この修正案により、古平・余市間の道路は国道に復活した。だが、これでは積丹半島の大半は国道網から外れることになり、いぜんとして陸の孤島から救われる機会を

← 後に建設された観望橋から西古美山を望む



失うことになる。関係町村は積丹半島をめぐる路線の国道指定を固執して譲らなかった。

しかし、全国で国道の総延長が二万キロメートルに抑えられている厳しい制約の中で、全国都道府県と国道争奪の請願、陳情を重ねたが、この要求は道路法に合致せず、基準に至らないとしてついに認められなかった。

晩秋の風物詩

大 澤 文 子

晩秋ともなれば、北国の主婦達は慌しく忙しい。塀越しには止み間なく散るもみじ葉。出揃った芒の穂波は枯れそぼちひそかなる音をたてて揺れる。

はや初冠雪のニュースも流れ、庭木の手入れや雨戸の手入れ、野菜の貯蔵等々、主婦達はやがてくる厳冬に備えての準備に大わらわの毎日である。もう少し身体のすみずみまで温かい日差しを浴びたかったな。そんな思いにかられる日々である。

そう言えば、いつもは執拗に顔や手にまつわりつき、「早く冬支度をしなさいよ!」と言ってくる雪虫も、今年はあまり見かけられることもない。

おちこちの店頭には、はや人待ち顔に冬支度の野菜類が満載している。直径二十センチ位の青々とした

大きなキヤベツが店頭でデン!と置かれ、その片隅には手ごろの大ききの肌の白い大根がいく本か丁寧に小箱に納められ、人待ち顔に買い手を待っている。

そうそう思えば若かりし頃には、時季がくれば人並みに姑(はは)と一緒に四斗樽、二斗樽に種々の漬物を造り、なれぬ仕事のため冷たく大変だったことも、今は懐かしく思い出のひとつである。

再び札幌の地にもどつて来てからは漬けることもなく、物置に片付けておいた漬け樽もいつかいつか籠もゆるみ、始末をしてもらったことをフーツと思ひ出す。

現在はデパートの食料品売り場にたたびたび足を運び、好みの漬物を求めて来ている。街の人達も現在では時季が来ても大根を縄であみ、軒下に下げている家々を見かける

こともない。まあ木造の建物が少ない関係でもあろう。

昔の鯉場では、どこの家でも海近くにはサキリがあつて、そのサキリに縄であんだ大根を下げ、海風に大根の肌をなぶらせていたのであろう。要はおいしい漬物が出来ればいいのだから…。

だが、晩秋の懐かしい風景も年々へる傾向にあるのでは…。人の心にはさまざまな思いを訴える思いが晩秋にはある。

先日、買い物に出かけた帰りにふと見かけた情景をほほえましく、一瞬立ちどまり振り返つて見たことがあつた。この辺りはやや高い地にあるので、玄関に入るまでに何段か石段がある。その石段の手すりに、振り分け荷よろしく大根を縄で結び下げてあるのだ。若い夫妻の家であらう、ほほえましく思い「おいしい漬物が出来そうですよに…」と小声で祈りながら、急ぎ夕べのわが家もどつて来た。

ドアをあけると郵便物が五、六通散つた。あつ一通は仲よしの友達だ、元気らしい。新潟市の娘さんの

所へ越して行かれたのだ。「新潟はいよいよ、ステキよ」と、私の気をひくような文章だ。うーん、新潟と言えば、私の誕生した所だ。それよりも『母の漬物…』と言いたい。

母は漬物の時季になると、父の勤めていた師範学校の先生方の奥縁方に声をかけ、毎年毎年一緒においしい漬物を作っていたのだ。あまり広くもない中庭の草原にござを三枚も敷き、四、五人もの先生方の奥様に声をかけ、漬物をしていた母だった。不思議に今でも私は覚えていたのだ。

リヤカーで運ばれた土のついた大根も、頬かぶりした女性達に洗われ縄で編みこまれ、夕近くには再びリヤカーに積み込み、最後の所作も終了。母の手づくりのカステラ、甘いお茶でおしやべり三十分、リヤカーを押して帰って行くのが例年のことだった。母は、父が帰ってから編みこまれた大根を板戸の外側に干してもらおう、と言っていたのを覚えていた。

「邪魔しちゃうダメヨ!」
今でも母の声が聞こえそう…。

『ニシン場の用語』と『古平町のニシン漁獲高』

過日、ある会合で話しの資料として使用したのですが、どこで伝え聞いたのか「資料として欲しい」との希望もありましたので、その2ページを掲載することにしました。

小樽周辺では早々とニシンの話題が新聞を賑わしていましたが、昔のニシン漁期であれば三月末に網おろし、四月からがいよいよ待望のニシン漁本番です。

ニシン場の用語 (北海道水試月報・昭和62年より)

いっこく ニシン漁獲量の単位で生ニシン750 kg (200貫)。乾製品は150 kg (40貫)。
北海道の春ニシン漁獲量の最高は明治30年の1,298,369石 (973,776トン)である。

春ニシン1石当り尾数 (昭和21~30年 10年間平均)

年 齢	3	4	5	6	7	8	9	10
1尾平均 体重(g)	147.3	207.1	262.7	304.3	331.1	357.6	370.8	381.8
1石当り 尾 数	5,092	3,621	2,855	2,465	2,265	2,097	2,023	1,964

いっそく 量目を現わす単位。胴ニシン10連 (200尾)をそろえ、中央を結束したもの
をいう。重量は7.5 kg (2貫)

いっば ①身欠きニシン100本 (尾)を結束したもの。②ニシン刺し網の場合は、およそ
長さ6.6 m、幅2.5 mのものをいう。

いっばい 汲み船が満船の量 (約10石=7.5トン)で、計量の単位とした。

いっび 植物繊維。木槌で軟らかくしてから手でない、身欠きニシンの結束のほか納屋張
りなどに使用。

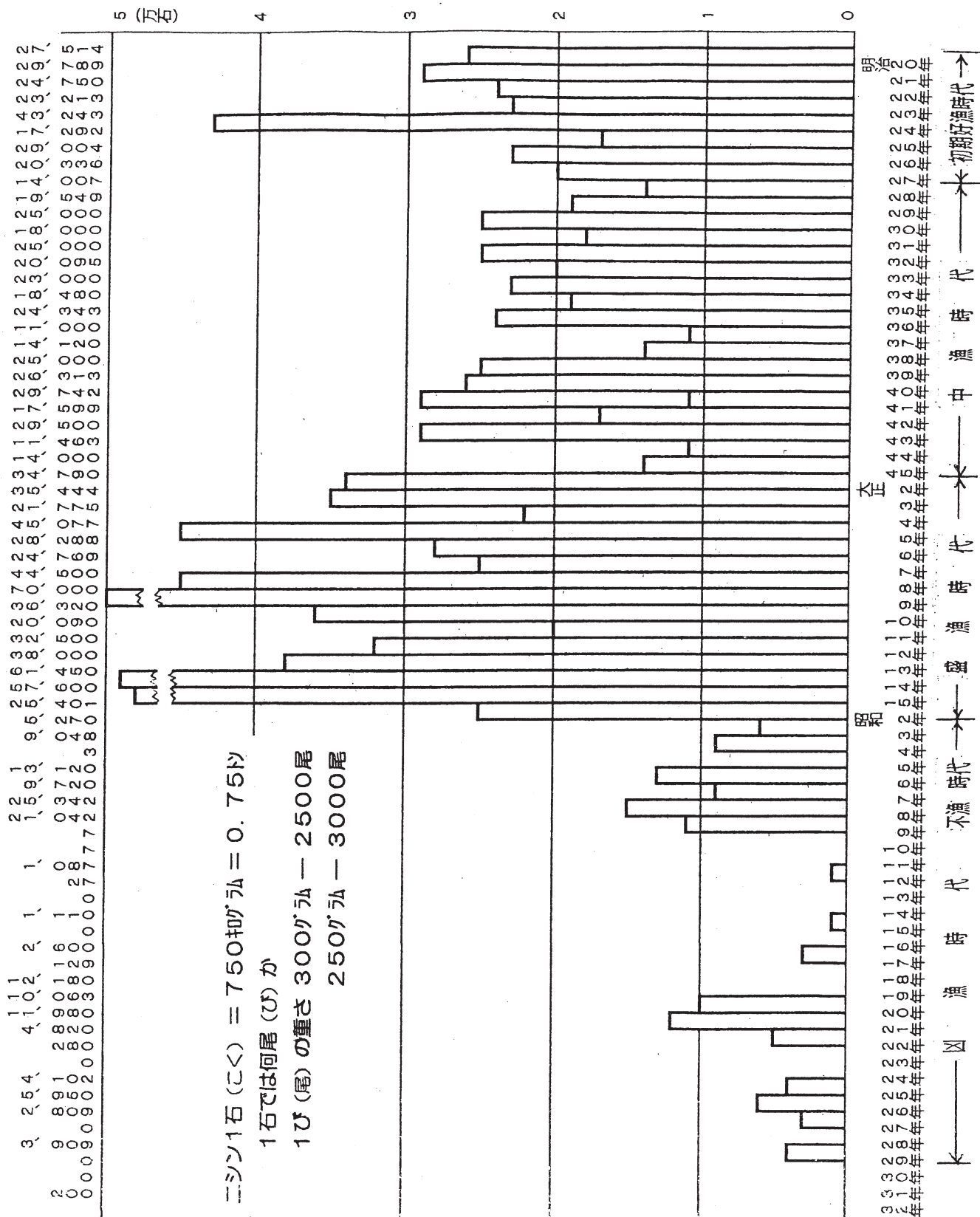
いっほん ①ニシン製品を筵で梱包する際の単位。年代や製品により重量は異なったが、
身欠きニシンについていえば、古くは100尾をシナ皮で束ねて一把とし、24把を筵に包んだ
ものを建1本とした。ニシン漁業末期における基準は次のとおり。

身欠きニシン、胴ニシンは60kg (16貫)、乾カズノコ、乾白子、乾笹目、ニシン搾粕は
いずれも90kg (24貫)。

②身欠きニシンを製造する時の単位。つなぎつら1本に、生ニシン20尾をつないだもの50
つなぎ、すなわち1,000尾が標準。落ちたり、目減りしたりするので入れ目をする。

五斗田でもれたけいへいかよれたか

(明治20年、昭和32年まで)



短歌

古平町岬短歌会

初雪にゐるりべの祖母温く手を包みくれし面影うかぶ

池田 テル

裸木を真白き雪の華つつむ厳しき季節生きゆく強く

泉 清三

忙しく過ぎゆく日々や年の暮れトンビはゆつたり雪空に舞ふ

金子 寿子

陽の光り雲の間より一時をやはらかな雪の上にかがやく

坂本 信子

木枯らしの揺さ振る梢に柿いくつ落ちむばかりなり霜月もゆく

鈴木 時子

温泉に家族揃ふを楽しみに雨ふり押して古平を発つ

玉谷 美都子

孵したるインコのユキは雄の五才慣て懷いて肩にとまりぬ

寺田 カツ子

朝夕の吹く風つめたく身に凍みて窓は結露す冬めく気配

仲谷 喜美能

海鳥を散らしゆきたる磯舟の航跡朝日にかがやいてをり

堀 典子

俳句

古平俳句会

闇空の炎となりて秋祭 越野 清治

綿虫の乱舞にしてふれ合はず 斉藤 波留

川の面も曇天なりや秋深し 山口 悦子

ひよどりの目にせば既に山河越え 越野 敏雄

コスモスは芯の強さを秘めて咲く 大和田 絵伊

一日の始まる街の色も秋 高橋 重子

栗拾ひ手と手とつなぎ童歌 外山 俊久

秋高し残照の岬美しき 堀 典子

短冊に落款を押し初紅葉 渡辺 嘉之

秋の日や浮き立つてゐる岬の波 室谷 弘子

河原の野菊に風のほぐれをり 仲谷 比呂古

悠

雜詠 〔十二月号〕
主宰 水見壽男

連峰の雪溪のなほ風の冷え 越野清治

峠には峠の音色秋涼し

【句評】

堀典子

海霧襖船音破り出漁し

【句評】

渡辺嘉之

閨涼し岬の波音なほ涼し

山口悦子

玫瑰香にふれ沼の香にふれし

島武意や渚百選月の波

秋の潮藍を深めていよ濃し

聖堂の寿ぐ聖鐘今朝の秋

孟蘭盆や僧の真上に星一つ

越野敏雄

風そよぐ樹木のゆれも秋はじめ

窓の秋眺める毎に色変る

落日の窓の澄みある秋涼し

一面に秋しのび寄る今朝の空

潮風に身を寄せ合へる花芙蓉

青空を忽とぬり変へ大夕立

高橋重子

虫取りに野山を駆ける子等の秋

河童連水に飛び込む酷暑かな

亡き友と乾杯夏の夜の夢

虫たちが秋の序曲を奏でをり

秋の夜の孤独を怖る孤独かな

秋日濃し階下るとき祈るる影

浮く雲のとぎれとぎれや稲光

手の平掬ふ銀河や岬の風

揚花火星なき空の星となり

花火果て海にもありし虚脱感

手花火の烟に風の行方知る

朝顔のいつも海見る窓に咲き

砂尖り風ささくれて浜の秋

名月の名残に揺らぐ岬の波

今日の月乗せてで船の音高し

一湾にまかり出でたる月とこそ

大いなる海になだるる虫時雨

【句評】

室谷弘子



怒涛

【四二】

— 二月号 —

古平俳句会

笛の音に燃ゆる闇空秋祭 越野清治

火渡りの燃やす闇空秋祭り

草もみじ命を色に見せばやと 山口悦子

残菊の香るかすかを壺に愛で

山すその紅葉の上る早きこと 越野敏雄

窓開く静かに入るそぞろ寒

語りかけ遺影は無言鉦叩 大和田絵伊

荷を解けば親子の絆秋深し

晩秋やゆかりの家に佇みて 高橋重子

晩秋や長き影つれ帰宅せり

孫よりの電話が弾む運動会 外山俊久

開催の合図三発運動会

月光に一葉揺らさぬ森なりし 堀典子

月光に鎧はぬすがた裸身濡る

そぞろ寒すき間だらけの浜番屋 渡辺嘉之

帰らざる山河ありけり鳥渡る

岬の波揺らし続ける秋の声 室谷弘子

岬鼻に荒るる波頭や秋の声

古里の海見える丘木の実ふる 仲谷比呂古

私の一首

十月・十一月詠草

わが庭にひときは華やぐ花ふよう根分けくれたる亡き人しのぶ

金子 寿子

澄み切った秋空に開花する花ふようを眺めながら、この花を下さった今は亡き人を思い出し、秋彼岸を間近に迎え仏様に感謝の気持ちで詠んでみました。

秋の風に十五夜の日を母言ひし赤きグミ原おもひ出づるも

池田 テル

秋が来れば十五夜さんとは暦をめくった母、丘の上の真っ赤なグミの原を秋になると思い出す。仲良しの子らが語り合いながら、小園や露の葉に熟れたグミを包んで楽しげに行く姿は本当に微笑ましいものでした。

わが庭にひときは華やぐ花ふよう根分けくれたる亡き人しのぶ

金子 寿子

澄み切った秋空に開花する花ふようを眺めながら、この花を

下さった今は亡き人を思い出し、秋彼岸を間近に迎え仏様に感謝の気持ちで詠んでみました。

職しきて短歌に遇へて先輩に支えられつつひととせ過ぎぬ

玉谷 美都子

景色を見たいと数人でドライブとなり、協働の家に伺うことに

なりました。お天気もよく古平町全景、積丹岳と眺めはとてまよく、癒れるひと時を過ごすことができました。

しめやかに「千の風」流るる斎場に笑まふ従兄弟の遺影に額づく

丹 後 初 江

突然の訃報に、平素の無沙汰を心で詫びながら斎場に向いました。そして中に一步入ると、あの「千の風」の曲があたりを包むがに、低ゆつたりと流れておりました。あの大空を吹き渡っています……遺影もやさしい笑顔の従兄弟でした。その時、私は一瞬悲しみがやすらいだ気持ちで手を合わせ、お参りいたしました。

テレビ見て「奥入瀬溪流」遠き日の修学旅行よみがへり来る

田 中 香 苗

修学旅行など出来ぬ現実、せめてテレビで日本の自然を楽しむみたいと考えたある日、思いがけなく「秋の奥入瀬溪流」の番組を目にし、何十年前の修学旅行を思い出し懐かしかったです。

編集後記

▽激動する世相をしり目に、今年の

冬はまことに穏やか、暦が一ヶ月ほ

どずれているのではないか、と思わ

れるような天気です。二月中旬なの

に、ミカンの産地静岡周辺では気温

が二六度にも上がったそうです。これなら古平では夏の気温です。

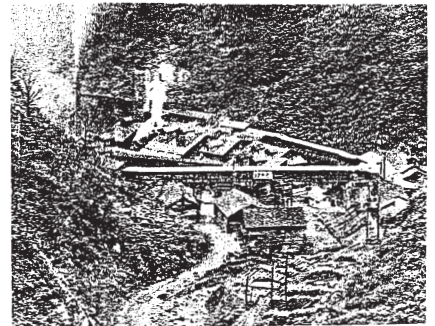
▽『せたかむい』の発行がすっかり遅れまして申し訳ありません。この好天氣に励まされて、何とか挽回すべく鋭意がんばります。

▽一年余りにわたって独自の短歌を寄稿くださった瀧内優子さんがお亡くなりになりました。日頃から自宅の庭園に精を出し、短歌に親しんでおられました。訃報に接し心からご冥福をご祈念申し上げます。

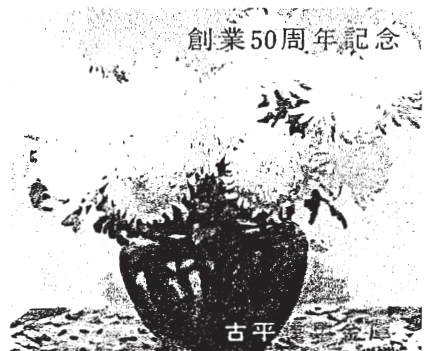
古平町史年表

昭和40年 (1965) ～ 続 き

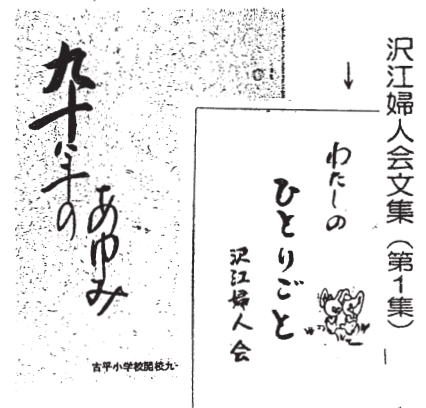
- 7/ー：稲倉石鉱山が保安優良鉱山として、札幌鉱山保安監督局から表彰される(昭和35年以降無事故)
- 8/3：第13回全後志婦人研修大会が古平町(古平小学校)を会場に開催される
- 8/22：北海道開発局長が古平漁港を視察する
- 8/ー：古平信用金庫創立50周年記念式、並びに祝賀会が古平小学校を会場に行われる
- 8/31：古平小学校創立90周年記念式、並びに祝賀会が行われ、児童の作品展が開かれる
- 9/5：毎日新聞社主催の第3回小樽～積丹間駅伝大会が行われる
- 9/27：古平町肉牛協会設立総会が開かれる
- 9/ー：台風24号の襲来により、町内の水稻にも被害が出る(被害額概算二千万円)
- 10/1：古平町水産加工業協同組合が設立され、組合長に吉野富雄が選出される
- 10/2：古平町上水道新設工事竣工式が古平小学校で行われる
- 10/6：古平町役場吏員中森幸一郎が、戸籍担当の長期勤続職員として法務大臣より表彰される
- 10/ー：古平小学校長水野幸徳が、北海道教育功労者として道教委より表彰される
- 11/1：古平漁協ではスケソウ漁での木函の使用を廃止し、鋼函を使用することを決める
- 11/2：古平～美国間海岸道路の開通式が丸山隧道口で行われる(工費約4億5千万円)
- 11/18：沢江地区の女性を対象に沢江婦人会の設立総会が開かれ、会長に大澤文子が選出される
- 11/22：浜町に古平自動車教習所が開設されたが、間もなく閉鎖となった
- 12/11：余市町の大謀網で白長須クジラが捕獲され話題となる(体長4.5メートル・重さ1.9ト)



↑ 稲倉石鉱業所(昭和30年代)



↑ 古平信金50周年記念誌



↑ 古平小学校90周年記念誌



↑ 開通直後の群来町海岸道路